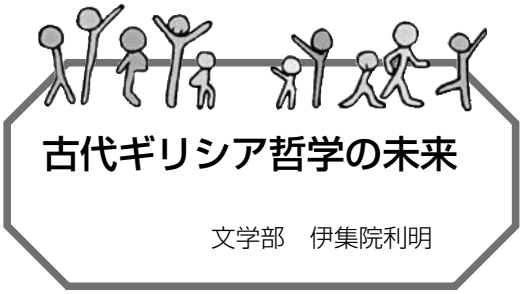


古代ギリシア哲学の未来

文学部　伊集院利明

私は、それなりに長い間、西洋古代ギリシア哲学、とりわけ、ソクラテス・プラトン哲学の研究に携わってきたが、かなり前から、次第にそこから研究領域を移し始め、現在では、人生の意味（meaning in life）、愛、幸福といった、人間にとっての諸価値についての哲学研究を自分の研究の主分野としている。ここに記すのは、そのような研究者としての現在の私の目から見て、これからの哲学界において古代ギリシア哲学と古代ギリシア哲学研究がどのように扱われていくであろうかの未来予測が、映るかという話となる。

おそらくは､それなりに長い将来にわたって、古代ギリシア哲学は、哲学界において一定程度に重要なものであり続けるであろう。ただし、古代ギリシア哲学研究がどれほどの重要性を持ち続けるかは、私自身にはなんとも予測がつかない。

哲学という学問において、哲学史研究は、例えば、歴史学における歴史学史研究、社会学における社会学史研究などとはちがう、独特な重要な位置づけを保持し続けている。哲学は、心理学や社会学や物理学などと同じように、現在進行形の学問であるのだが、にもかかわらず、哲学史上の（昔の）諸説は、最先端の哲学の新たな局面を切り開くための、参照点として、そして起爆剤として、現在でもかなり大きな役割を果たし続けている。

20世紀後半から現在の哲学の展開において、アリストテレス哲学の果たした役割にはかなり大きなものがあると言ってよい。近代倫理学諸説に対する対抗軸として、徳倫理学が、アリストテレス倫理学への参照を出発点として、提起されていったことにとどまらず、幸福、その他の諸価値についての諸観点の導入に果たした役割、また、プロネーシスという柔軟な知性のあり方への注目など多くの点で、アリストテレス哲学は、様々な哲学諸説の開拓に大きな役割を果たした。そして、アリストテレス哲学の最も大きな影響は、おそらくは、その哲学的方法論であると言ってよいかもしれない。少なくとも、私の研究にかかわる価値論、（広い意味での）倫理学といった分野では、アリストテレス的な弁証論的方法を継承した反照的均衡などの方法論が、哲学的考察のほぼデフォルト設定とでもいうようなものになっていると言える。その意味でも、今日われわれはかなりの程度においてアリストテレス的な仕方で哲学をすることが当たり前になっているとさえいえる。

古代ギリシア哲学が今後の哲学の発展、展開のための起爆剤、参照点としてどれほどの役割を果たしていくかについては、これまでの実績などからおおよそのことを推し量る以上のことができない。しかし、昔の実績だけではなく、ここ10～20年ぐらいの実績から自然に考えるならば、古代ギリシア哲学がまだまだある程度の役割を果たすことは当然期待していいだろう。しかし、問題が二つある。

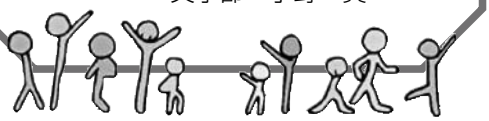
まず、古代ギリシア哲学が起爆剤、参照点としての役割を果たし得るようなものであっても、古代ギリシア哲学（史）研究がどれほどの役割を果たし得るかは不明確なところがある。それほど詳細で緻密な読み込みのない、ごく一般の哲学者にとっても、古代ギリシア哲学はそれなりに魅力のある発想の源でしばらくはあり続けるであろう。一方で、20世紀後半にアリストテレス哲学が与えた刺激を振り返ってみるならば、それが当時のアリストテレス哲学についての緻密な文献研究との連動抜きにはあり得なかったことが思い起こされてくる。例えば、G. Owenをはじめとした当時の活発な研究抜きには、とりわけ、アリストテレス的方法論への哲学界の着目は不可能であったであろう。もちろん、これまでの実績から考えて、そのような緻密な哲学史研究が最先端の哲学諸説を賦活化させる可能性は考えられる。しかし、問題はいわばコストパフォーマンスであり、どこまで哲学史研究の労力に見合ったものが得られるかの見

込みについての実感のありようによっては、研究は衰退していく可能性もある。

もう一つが、ソクラテス・プラトン哲学についてである。ヘレニズム期より後の西洋哲学史において、プラトン（的）哲学が優位であった時期とアリストテレス哲学が尊重された時期がある。前者としては、教父哲学の時代、ルネサンス期が、後者としてはスコラ哲学の時代、そして20世紀（特に後半）以降現在に至るまでが挙げられる。プラトン優位時代はまた訪れ得るのであろうか。プラトンの著作はギリシア哲学についての哲学史的知識がなくともとりあえずは楽しめるようなものである。しかし、それでも、ギリシア哲学史研究の基盤を欠いたところでは、それは十分には機能を果たし得ないかもしれない。一見「割に合わない」ようではあっても、一定数の学者がギリシア哲学史研究を続けることは必要なのかもしれない。

古典を撫でる『アクタ・サンクトールム（聖人伝）』

文学部　小野　賢一



この春、手術・入院を経験し、海外渡航ができない健康状態になってしまった。そこであらためて海外渡航をせずに、いかに愛知大学で生活を充実させることができるかを考えてみた。手始めに自分の学問について、振り返ってみることにした。

私の専門は西欧中世史である。中世史家が用いる史料は、主に5世紀から16世紀頃に書き記された古文書である。ヨーロッパの古文書館では生の史料をみることができる。現物が残っていることもあるし、写しだけが残っていることもある。千年も前に書き記されたものとは思われないほど鮮明な史料に出くわすときもある。そのような幸福に巡り合ったときには、西欧中世史を専攻してよかったとしみじみ思う。これら西欧中世の史料の多くは、ラテン語で書かれている。ラテン語は古代ローマ帝国で使われていた言語であったが、ローマ・カトリック教会が教会で用いる言語としてラテン語を採用したこともあり、中世を通じて学術・行政・法律などの文書はラテン語で書き記されることとなった。

西欧中世の社会は、「戦う人」である貴族と「祈る人」である聖職者と「耕す人」である農民の三身分が明確に分かれた社会であった。これは、インド・ヨーロッパ語族に共通して見受けられる特徴である。貴族と農民は、古い時代のドイツ語やフランス語などの俗語を使って生活し、ラテン語を使いこなすことはできなかった。そのため、唯一ラテン語を使いこなすことのできた聖職者が、学術・行政・法律などの文書を扱った。西欧中世の社会では、聖職者が知識を扱う階級であった。中世の日本と異なり、役割分担がはっきりしていたのである。中世のヨーロッパに成立した大学には、ヨーロッパ各地から教師や学生が集まった。当時の大学の教師や学生の身分は聖職者であり、共通語はラテン語であった。この共通語としてのラテン語のおかげで、中世のヨーロッパの大学はインターナショナルな空間であった。

中世の大学生は熱心に勉学に励んだが、遊び人の学生もいた。またアルバイトに励む学生もいた。たとえば葬式で泣く「泣き坊主」のアルバイトなどがあった。学生寮もあった。パリ大学は通称ソルボンヌ大学といわれることもあるが、ソルボンヌとは学生寮をつくった聖職者の名前である。ヨーロッパ最大の学生街は、パリのカルチェ・ラタンと呼ばれる地区であるが、これは「ラテン語の地区」という意味であり、中世のパリ大学においてラテン語で授業が行われていたことの名残である。中世の大学では、あたかも教師たちはトサカを逆立てて争う闘鶏の鶏のように論争していた。こうした学生と教師の日常の風景は、今の愛知大学にも受け継がれているように思われる。

中世の大学は教師と学生が組合をつくることによって成立した。この組合のことを「大学universitas」といった。つまり大学とは、もとは教師と学生の組合であった。大学が、他の教育・研究機関と比べて、外部の権力からの自立